# 「問いのスピリチュアリティ」からの教育

林　貴啓

## はじめに

自分は何のために生き、そしてどのように死んでゆくのか——そういった問いを一人ひとりが真剣に問わなくても済んでいた時代は、この日本においても終わりを迎えたようである。かつては仏教をはじめとした宗教が日本人に生死の意味を与えてきたし、戦後は「昨日より今日、今日より明日もっと豊かになる」という経済発展の物語が、擬似的とはいえ多くの日本人に人生のよりどころを最近まで提供していた。だが90年代初頭に起こったバブル経済の崩壊以降、この物語ももはや追求しがたいことが露呈されてきた。伝統宗教にも往年の力はない。その結果、日本人一人ひとりが、自らの生死をどう受け止めるか、という問いに、満足な指針を失ったまま直面しなければならない時代となったのである。

その徴候はとりわけ子どもたち、若者たちに顕著に現れる。若い世代のうちでの不登校、引きこもり、フリーター、自殺などの増加は、「生きていく意味」を支えるものを彼らが欠いていることも一因であろう。人間は「何のために生きてゆくのか」ということについて確信があれば、相当な苦境をもくぐり抜けてゆける存在だからである。広井［1997：56］は、とりわけ若い世代に「死に向き合っての心のよりどころ」が欠けていること、つまり「死生観の真空」という事態が現出していることを指摘している。あるいは、はじめて「生と死の問題」に直面したときに出会ったのがカルト宗教であったとすれば、それに対して免疫を欠いたまま向き合うことの危険は大きい。

こうした意味でも、生と死の問題を「教育」という場で真正面から扱うことの重要性は、ますます高まっている。だがこの問題とかかわりの深い「宗教」を教育の場で扱うことは現状では難しい。確かに憲法・教育基本法が明確に禁じているのは公立学校での「宗派教育」であって、他のアプローチで宗教を扱いうる道はある。だが「宗教的情操教育」はその可否をめぐって思想的にも法的にも論議のかまびすしい事柄であり、その教育方法をめぐる困難を重ね合わせても、実践は至って困難なものである。

それに加えて「宗教」を教育の場で扱ううえでの困難として、ことに若い世代においては「宗教」へのネガティヴなイメージが著しい、という問題もある。「宗教と社会」学会の調査によれば、宗教に「アブナイ」というイメージを持つ若者の割合は過半数に及ぶ。この傾向は特に1995年のオウム真理教事件以降に顕著になっており、井上順孝［2004：116］はこれを「95年ショック」と表現している。日本人、ことに若い世代の「宗教」への忌避は歴然としているのである[1)]。「宗教」を教育の場で積極的に取り上げようとすれば、それだけで若い世代には拒絶反応を示されることにもなりかねない。

だからこそ「スピリチュアリティ」の立場からする教育が有望になってくる。スピリチュアリティの立場では、必ずしも特定の宗教への帰依を前提することなしに、宗教が扱ってきたような生と死の問題を語ることが可能になるからである。新しい言葉は、その言葉でしか表現できないような思考を可能にし、新しいパースペクティヴを開く。スピリチュアリティという言葉は、「宗教／無宗教」「信仰／不信仰」という単純な二項対立を脱した考え方、ひいては実践を可能にする。こうした変化こそが、スピリチュアリティという言葉がこの日本にもたらしうるインパクトなのである。

そこで本論考では、このスピリチュアリティの立場からの教育の可能性を論じてゆきたい。まずは、「スピリチュアリティ」の概念について考察する。そこからスピリチュアリティにおいて「問い」と「答え」という位相の区別を設け、「問いのスピリチュアリティ」に依拠することが、教育の場においては有意義であることを示す。そして、この理解に立脚した「問いのスピリチュアル教育」の実践方法について検討してゆくことにする。

## 1.「スピリチュアリティ」をめぐる日本の状況

「スピリチュアリティ」という言葉がこの日本で普及しはじめた背景には、周知のようにWHOの「健康」定義の改正案に「スピリチュアル」という文言が登場したことがあり、「スピリチュアル・ペイン」「スピリチュアル・ケア」というかたちで、医療の文脈で用いられたのが発端であった。人がじかに「生と死の問題」に直面させられる医療、ことに終末期医療という場面で、この言葉がいち早く取り入れられたのも当然である。だが今や、心理臨床、教育、環境問題、および日々の生活実践ほか、広範な領域にスピリチュアリティの問題圏が広がってきている。それは、人々が直接死期に直面するような機会がなくとも、「スピリチュアル」という言葉でしか表せないような切実な関心事を抱くようになってきた、ということを意味する。

スピリチュアリティという言葉が普及するのは、ひとつの時代の要請だったといえる背景がある。先に述べたように「宗教と社会」学会の調査でも、若い世代では特に「宗教」への否定的なイメージが顕著である。また同じ調査によれば、「信仰を持つ」と回答した若者の割合は1割程度にすぎない。しかし、「科学が発達しても宗教は人間に必要だと思うか」という設問には半数前後が肯定的な回答をしている。また「占い」「超常現象」「死後の世界」などの「宗教周辺」の事柄についても、やはり5～6割が「信じる」「ありうる」と答えている。井上［2002：20］はこれを総括して、「このように一方で宗教にはマイナスイメージがあり、実際の宗教団体、宗派、教団に関わりを持つことを避ける傾向が強いが、他方で、『宗教周辺』の事象への関心は決して低くない」と述べている。

また西平［2003B］は、「自分ではどうすることもできない運命」に対する実存的な実感や、「自我から離れて拡がった感覚」という非日常的・神秘的な体験について、「それを宗教とは呼びたくない」と断ったうえで語る多くの若者たちの例を報告している。わざわざ断ることは逆説的に、これらの事柄が「宗教」とかなり近いことを物語っている。「宗教」は敬遠しつつも「宗教的なもの」に関心を寄せる態度は、ここでも明らかに見てとれるのである。

こうした事情を背景に、「宗教には関わりたくないが、宗教が扱ってきた

ような事柄には強い関心がある」という姿勢を有効に表現できる言葉として、「スピリチュアル」という語が受容され、普及したと考えられる[2)]。この語が普及する以前に、森岡［1996］は宗教／無宗教の二分法に疑念を呈し、「人生の意味」「かけがえのない私の存在」といった宗教にかかわりの深い問いを、あくまで宗教の外で問うてゆきたい、という姿勢を表明していた。今であればこうした姿勢は、「スピリチュアル」という言葉で言い表せるだろう。ニーズはもともとあったわけである。

ただし、こうした「時代の要請」が先行していたとすれば、「スピリチュアリティ」が多義的に用いられるのもゆえなしではない。この概念は、明晰な定義とともに受け入れられたものではない。そこでどんな「宗教が扱ってきた事柄」に関心を寄せるかによって、多様な意味が込められることになる。葛西［2003］が提示している例だけでも、「神との深い交わりの状態」「生きがいを求める魂の働き」「いろいろな宗教の共通項、普遍的特徴」「心身両面の刺激による日常性からの離脱」とあり、この四つだけでも共通点を見出すことはかなり難しい。

その意味で、「スピリチュアリティ」という言葉を無自覚に用いていては、それで何を言わんとしているのか、混乱が生じかねない。スピリチュアルな志向を持つと自らを任ずる者同士でもコミュニケーションが困難になったり、あるいはひとつの意味で用いているつもりが無意識に別の意味に変質してしまったり、という事態も容易に予想されるところである。それゆえにこの言葉で何を言わんとしているのか、何らかの明確な了解は必要であろう。医療にせよ教育にせよ、ことが「実践」にかかわるだけになおさらのことである。

だからといって、「本来スピリチュアルとは……である（でなければならない）」と、本質主義的な規定を求めるのは不毛だろう。それは異なった「定義」の企ての間での意見の対立をいたずらに招くことに至りかねない。仮に、原語に即した「本来の」意味が存するとしても、それがこの現代日本という文脈でどれほどの意義があるのかは疑わしい。先に述べたように、今の日本では、必ずしも原義が顧慮されることなしに、「時代の要請」に応えるかたちで受容されているからである。

また、「スピリチュアル」を一義的に規定しようとすれば、この言葉が実

際の用例のなかで示している豊かな意味の広がりが大幅に切り捨てられてしまう、という危険もある。すでに医療の場面では、田崎ら［2002］の試みにあるように、スピリチュアリティを標準化し、数量的な尺度によって扱えるものにしようとする動向が見られる。だがこれに対して、辻内［2005：53］は厳しく批判する。スピリチュアリティの「標準化」はスピリチュアリティの「医療化」につながるものであり、「ひとつの言葉では表しえない深淵」であるスピリチュアリティの多様な含みが無視されてしまう、というのである。

確かにスピリチュアリティに対して一義的、排他的な規定を与えようとする試みには困難がつきまとう。だがこの言葉に多種多様な意味が込められ、いたずらな混乱を招きかねない現状に照らしてみれば、何らかの「方向性」「座標軸」を示すことは確かに必要である。そこで厳密で本質主義的な「定義」を求めるかわりに、むしろ戦略的な観点から、スピリチュアリティを理解するひとつの展望を提示してゆく、という道を本論考では採りたい。どのような観点から理解すれば、スピリチュアルな志向を抱く人々にとって、何が問題になっているかを明確にしうるか。お互いの間で有効なコミュニケーションが可能になるか。ますます多くの人が、「スピリチュアリティ」という言葉で自分の関心事を自覚し、表現できるか―こうした関心から、もともとの豊かで多様な意味の広がりを残しつつ、多くの人々にとって「参照軸」となるようなスピリチュアリティ理解を探るのである。

これはスピリチュアリティをめぐる問題状況全般にわたって有意義であろうが、われわれの議論の領域である「教育」の場面では、課題はこのようになる―生徒たちの「生きる意味の喪失」に応え、死を見据えつつ有意義な生を送っていく支援をするためには、どのような意味での「スピリチュアリティ」が有望なのか、ということである。以下ではこの課題を探究してゆきたい。

## 2.「スピリチュアリティ」理解の戦略

先に見通しを述べておこう。この論考で打ち出してゆきたい戦略とは、スピリチュアリティに「問い」と「答え」の位相を区別することである[3)]。「問い」のスピリチュアリティは、「人生の究極的な意味」「死後の運命」といっ

た事柄を自覚的に問題にしてゆこうとする関心・姿勢にある。それに対して、「答え」のスピリチュアリティは、そうした「問い」に対して何らかの方向づけを与えようとするものであり、特に、何らかの「超越」[4]の次元を肯定し、その次元とかかわるものである。この区別を通して、「超越」の次元を最初から前提として受け入れることなしにも成り立つスピリチュアリティの位相が切り出される。この「問い」の位相を出発点とした立場から、スピリチュアルな教育を展望することが本論考の構想である。

こうした位相の区別は、「スピリチュアリティ」の意味をめぐる先人たちの議論を踏まえて、さらに発展させたものである。そこで、従来の議論のいくつかを見てゆき、「問い」と「答え」との位相の区別を設ける意義を明らかにし、それが教育に与える示唆を探ってゆきたい。

まず安藤ら［2001］による議論を見てみよう。安藤らは、スピリチュアリティの定義をめぐって、心理学（ここでは主に人間性心理学・トランスパーソナル心理学を指す）の文脈と医療の文脈とで、違った傾向が見られることを指摘する。心理学の文脈では、意識的自己を超え出た「超越的次元」の存在と、その体験が重要な位置を占める。超越的次元の体験的自覚が「宗教」のもつ組織・制度といった側面を離れて求められ、その人の人生の意味・目的を支えるところに、スピリチュアリティの核心がある、というわけである。これに対して、医療の文脈では、「超越的次元」への関心はあっても、そうした次元への体験的自覚に基づくものだけがスピリチュアルと呼ばれるわけではない。「スピリチュアル・ペイン」「スピリチュアル・ケア」といったキーワードでも明らかなように、この語はより幅広い意味で用いられている。死に直面して、人生の意味や死を超えた希望を求めることがスピリチュアルな欲求として理解される。「人生の意味と目的の追求」がかかわることが全般に、スピリチュアルなものとみなされるわけである。

この二つの文脈におけるスピリチュアリティの関係を、狭義のスピリチュアリティと広義のスピリチュアリティの違いと解することは容易に思い浮かぶ発想であろう。しかし、問題は単に意味の広さにとどまらないように見える。一方は「超越的次元」の存在を肯定し、その体験的自覚がその人の人生を意味づける、という一定の「答え」を与えている。それに対し、他方は、

いかにして「人生の意味と目的」が見いだされるか、に関して、さしあたりオープンなままでも成り立つはずである。超越的次元の存在（を肯定すること）は前提になっていない。極論すれば、「人生の意味と目的」を問いぬいた果てに、純粋に世俗主義的、無神論的、ひいては虚無主義的な「答え」に満足する可能性も原理的には排除できないのである。結果的にどんな「答え」に到達するにせよ、「問い」そのものはスピリチュアルといえるはずである。つまり、二つの文脈での「スピリチュアリティ」の意味の違いは、「問い」と「答え」の位相の違いとして理解できる、ということである。

スピリチュアリティに「位相」の区別を設けることに関しては、西平[2003A]の議論がすぐれた視点を提供している。「スピリチュアリティ」に単一の邦訳語が確定されないでいる状況を逆手にとり、西平は多様な訳語の「ルビ」として「スピリチュアリティ」を用いる戦略を提案する。これによってこの概念の持つ豊かで多様な意味を浮き彫りにする一方で、多様な問題群をこの概念のもとで一つに統合してゆく可能性を示唆するのである。

西平は、まず「スピリチュアリティ」に「宗教性」「全人格性」「実存性」「大いなる受動性」の四つの訳語を提示し、これらをスピリチュアリティの四つの位相を表したものとして解釈する。第一の「宗教性」とは、「身体的」「心理的」「社会的」なものとは区別される、従来なら「宗教」が担当してきた領域を指す。他方、第二の「全人格性」は、「身体的」「心理的」「社会的」と区別されるのでなく、これらを内に含んで統合する位相である。第三の「実存性」という位相は、生死の問題を各人が我が事として切実に感じ取る、主体的な自覚にかかわっている。そして最後に「大いなる受動性」は、何か聖なるものに触れ「生かされている」と実感することにかかわる、というわけである。

この議論は、これまで錯綜を極めていた「スピリチュアリティ」の意味に見通しを与える画期的なものである。特にスピリチュアリティを「ルビ」として用い、多様な位相を区別しつつ統合してゆこうとする視点は卓見であろう。スピリチュアリティの相異なる意味を、互いに排斥しあうものではなく、異なる位相として位置づけなおす。これによってこの概念に含まれていた多面的な可能性が分節化され、明らかになる。スピリチュアルな志向を持った人たちが、自分がどういう意味でスピリチュアルなのかを自覚化する道も開

かれる。これは本論考が求める「理解の戦略」の良き先例ともなっている。

「位相」の区別を設けることに関しては、本論考も西平の方向性を受け継ぐ。だがスピリチュアリティをめぐっては、多数の位相を区別するだけでなく、ひとつの大きな区別を設けることも有効である、というのが、本論考からの新たな提案なのである。それが「問い」と「答え」の位相の区別なのである。

西平の議論に沿って言うと、「実存性」は他の位相とは単純に並置できないことを指摘したい。というのも「実存性」としてのスピリチュアリティは、その根本において「問い」の事柄だからである。「実存性」においては、「かけがえのない私の存在の意味は何か」「人は何のために生きているのか」「世俗主義的な生き方で人生は本当に満たされるのか」といった問い、そうした「問い」を自らの身に引き受けて主体的に問うてゆくことが中心となる。それに対して、「大いなる受動性」などの他の位相は、この「問い」にどのように答えるか、にかかわる。明確な答えを与えはしないまでも、一定の方向づけを示しているといってもよい。例えば「身体・心理・社会すべてを包括した全人格的なかかわりによって」「聖なるものに触れ、生かされているという経験によって」、実存的な問いに導きが与えられる、というわけである。だが「実存性」としてのスピリチュアリティは、そうした方向性に関してはさしあたりオープンなままでも成り立つはずである。こうした意味で、「実存性」としてのスピリチュアリティと他のスピリチュアリティとに、「問い」と「答え」という、位相上の基本的な区別を設けることのが適切だと思われる。

このようにして、スピリチュアリティに関して、まずもって「問い」と「答え」の二つの位相を大別できるだろう。「人生の意味」「死後の運命」といった事柄を、実存的・自覚的に問うてゆこうとする姿勢が前者である。それに対して、後者は何らかの「答え」を与えるものである。「諸宗教の核心にある体験」「生かされて生きていることの自覚」「超越者や来世の存在を肯定した生き方」といった形態が考えられる。単なる現世的な生き方を超え出ていること、そしてそれが制度宗教の外でも成り立つこと、がとりわけ「スピリチュアル」といわれるわけである[5)]。そして「問い」の位相にまず立脚してスピリチュアル教育は推進してゆくべきである、というのが本論考からの提言である。

ただし、「問い」の位相に関しても、「超越」の契機が「問いにのぼって」いることが、スピリチュアルであるための要件といえよう。物質主義的・自然主義的・世俗的な次元を超え出た生き方をもってしてはじめて、人生の究極的な意味は満たされるのではないか。日常の意識的自己よりももっと深いところに、真の自己が存するのではないか。この目に見える日常世界を超えたもの、目には見えないが私たちを生かしている聖なるものが存在するのではないか。こうした、「超越」の可能性が、最終的にどんな答えが出されるにせよ、少なくともありうべき「答え」の可能性として「問い」にのぼっていてはじめて、単に「実存性」だけではとどまらない、「実存性としてのスピリチュアリティ」が成り立っているといえる。「超越的次元の自覚」がバックボーンにならなければ、スピリチュアリティの本質が損なわれる、とする安藤ら［2001：8］の主張は、こうした意味で理解するのが適切だと思われる。

この意味で、「問い」のスピリチュアリティは、「答え」のスピリチュアリティとのある種の緊張関係のうえで成り立っているといえる。答えに対してはオープンだといっても、スピリチュアルな問いには「超越」の可能性との対決が伴っている。これによってはじめて、「人生の意味」をめぐる問いも、究極まで問い抜けるにちがいない。このように「問いのスピリチュアリティ」の位相を切り出す第一の意義は、何らかの明確な「答え」をまたずしても、スピリチュアリティの問題圏に入ってゆける道を開くことである。一定の存在論的コミットメントを留保したままでも成り立つ「スピリチュアリティ」の場面を確保できることである。つまり、神や仏、宇宙的生命や来世などの「超越」の次元を最初から肯定することは、「問い」のスピリチュアリティにとっては必須の条件ではない。こうした「超越」が「問い」にのぼっており、深く実存的な関心事となっていれば、それだけでスピリチュアルな志向として語りうるのである。

「スピリチュアル・ケア」、ひいては本論考の焦点である「スピリチュアル教育」を実践しようとすれば、「超越」の次元の存在を受け入れるかどうかは、ひとつの大きな論点、あるいは争点となりうるところである。神仏は存在するか。来世や不滅の霊魂は存在するのか。現世的、自然主義的な生を超え出た生の次元は成り立つのか―現実として、こうした存在論的コミットメ

ントの問題は、明らかに意見・立場の相違が見られる事柄であろう。「超越的なもの」の実在を最初から前提としたうえでの実践となれば、これを受け入れられない人々も少なくないはずである。森岡［2005］が「死後の世界を信じられない者」としての立場から死生観やスピリチュアル・ケアの問題を問いに付しているのが、その典型的な一例だといえる。「信じるか、いなか」という存在論的コミットメントを最初から要求するような立場には、この意味で限界と困難がある。

「問い」のスピリチュアリティをまずもっての出発点とすることの最大の意義は、これによってスピリチュアルな事柄がいっそう広範な人々に受け入れやすくなることである。ますます多くの人々が「スピリチュアリティ」という言葉で自らの考えること、思うこと、感じることを理解でき、表現できることである。人生の究極的な意味と目的をめぐる「問い」であれば、ほとんど「誰でもの」関心事となりうるからである。

スピリチュアリティはそもそも、特定の教団宗教への帰属・信仰を前提することなく、生死の問題のような宗教が扱ってきた事柄を語ることを可能にする概念だから、基本的に「宗教」よりは広範囲の人々に受け入れられるかもしれない。しかし一定の方向性を含んだ「答え」のスピリチュアリティの位相で語ろうとするかぎり、結局は特定の関心・志向を持った人々にのみ受容可能な、ごく限定的な立場にとどまってしまう恐れは常にある。これでは、他の方向でスピリチュアルな関心を追求している人、あくまで「問い」のレベルで「人生の意味」「世俗的・物質主義的な生き方を超えた人生」を求めている人をも排除することになるからである。つまり、対立軸を従来の「宗教／無宗教」「信仰／不信仰」から、ある程度ずらしただけに終わる、ということにもなりかねない。

その意味でも、スピリチュアルな関心事を万人に開かれたものにするためには、「問い」の位相にまず定位することが重要なのである。現世的・物質主義的な生き方、自己のあり方を疑問に付し、それでは満たされないものを求めるに至ったなら、人はすでに「問い」のスピリチュアリティに入っている。自らの思いを「スピリチュアル」と表現できる。一定の「答え」を前提しないからこそ、それはさまざまなしかたでのスピリチュアルな「答え」を

求めてゆく窓口、あるいは機縁ともなる。ケアにせよ教育にせよ、スピリチュアリティの立場として第一に求められることは、一定の答えや方向性を示すことではなく、こうした問いの場、機会を開くことではないだろうか。

## 3.「問いのスピリチュアリティ」に立つこと

「問いのスピリチュアリティ」、それは実践者に、ひとつの微妙な立場に身を置くことを要求する。その「微妙さ」とはどんなものかを明らかにするために、スピリチュアリティあるいはそれに類する立場において、これまで見られた問題について考察しておきたい。

まず、「教育」の場面でしばしばその推進が主張された「宗教的情操教育」をめぐる論議を省みてみよう。宗教的情操教育は、「特定の宗派に限定されない宗教心を養う」教育と定義される［菅原1999：18］。このアプローチは「宗派教育」とは違って公教育でも実施は可能であり、かつ望ましい、と推進者たちは主張してきた［家塚1985、杉原1992］。「特定の宗派に限定されない宗教心」とは、一部の論者による「スピリチュアリティ」の規定とほとんど重なるかに見える。

だが、宗教的情操教育は、たびたび推進が主張されながらも、異論も激しく、有効に実施されていないままなのが現状である。法的・イデオロギー的な観点、あるいは実践上の困難に即した批判を措いて、その主張内実に照らして検討すれば、特に強力な批判は、「普遍的な宗教心」の存在を疑問視する声である［加藤1998］。特定宗教、ことに神道の立場がそこに混入することを批判者は警戒するのである。実質的に宗派教育となり、公教育での実施は許されない、というわけである。

「特定宗派に限定されない宗教心」の成否については、今は論を留保したい。ここで確認しておくべきは、それが賛否両論のある、論争的な問題だということである。つまり、広範な賛同を得られる事柄とはなっていない。これは見方を変えれば、宗教的情操教育が結局は、一定の宗派とはいわないまでも、一定の「答え」―世界観・人間観―を前提としている、ということである。その答えに向かって生徒を教え導こうとするアプローチだからこそ限

界があり、異論を招くのである。

具体的に論じよう。宗教的情操教育のキーワードである「畏敬の念」は「生命の根源すなわち聖なるものに対する畏敬の念」（中教審「期待される人間像」）あるいは「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」（1999年学習指導要領）と表現されている。ここでは明らかに、「生命の根源」「人間の力を超えたもの」の存在が前提となっており、一種の有神論的（あるいは汎神論的）な世界観が支持されている[6)]。逆に言えば、世俗的ヒューマニズム、自然主義、唯物論などとは確実に対立する。これでは、後者のグループの世界観を支持する論者たちから批判を受けるのも当然である。このように、宗教的情操教育とは一定の「答え」を用意して、そこに生徒を教導しようとするアプローチにほかならない。この点で、「答え」に関してオープンな「問い」の位相のスピリチュアリティに立脚したわれわれのスピリチュアル教育とは立場を異にする。

オープンな「問い」の立場が一定の「答え」に変質する危険については、常に自覚的である必要がある。この変質は、情操教育論の文脈ですでに実例が見いだされる。家塚［1985：27-29］は「ある人にとって、究極的絶対的な意味をもつ価値が志向されている」場合その情操を「宗教的」情操と呼ぶ、と述べており、ここではどんな価値が究極的なものかについてはオープンにしていると受け取れる。しかし続いて「究極的な価値」を「人間のいのちと関わるもの」「生命の根源」と解する立場を表明するとき、完全に一定の「答え」を与えてしまっている。これは明らかにある種の生命主義的世界観を前提した発言だからである。その「答え」の普遍性が疑われうるのは当然であろう。

「スピリチュアリティ」に関しても、「諸宗教の共通の核心」「宗教の外でも成り立つ超越者とのかかわり」のように解された場合、結局は一定の「答え」を与える立場となる。どこに「諸宗教の核心」を見いだすかに関しては論者によって主張が分かれる可能性が高い（「宗教」の規定をめぐる宗教学者たちの議論の多様さを見るだけで明瞭だろう）。結局は特定の宗教・思想に偏した「スピリチュアリティ」の立場が打ちだされかねない。すでに西平［2001］がマズローの心理学的宗教論に即して、こうした変質の事例をたど

っている[7]。あるいはまた葛西［2003］は現在の日本での「スピリチュアリティ」の用例を検討し、そこには「福音主義者の祈りやヒューマンケア専門職の理想としての〈成長〉モチーフ」が反映されていることを指摘する。こうした特定の価値観が「スピリチュアリティ」の名のもとで一般化される危険には十分に警戒すべきであろう。こうした立場からスピリチュアル教育を打ち出そうとすれば、「情操教育」同様の異論を招くことは避けがたい。

こうした意味で、何らかの「答え」のスピリチュアリティに立って、その方向に生徒を導こうとするスピリチュアル教育の問題性については、どこまでも自覚的である必要がある。だがこの議論は逆の方向にも向けうる。「超越」の次元をまったく取り上げないこともまた、世俗的ヒューマニズムあるいは自然主義の世界観へと生徒を導こうとするのも同然であり、一定の「答え」を前提にした教育にほかならない、ということである。これは、特に現在の日本社会という文脈を踏まえるとなおさら重要であろう。というのも、この世俗化の進んだ社会では、「人生の意味」を問うとしても、そのままでは現世的・自然主義的な答えの可能性だけが想定されがちだからである。「この世を超えたものは存在しない」「人は死ねば無になる」といった答えが自明化しているからである。「超越への扉」が閉ざされている、あるいは扉の存在すら忘れられている、というのが実情だといってよい。

そういうわけで、問いのスピリチュアル教育は、教育者にある微妙な立場に身を置くことを要求する。自身の持っている「答え」がどんなものであれ、教育に臨むにあたっては、「超越」の次元を単純に肯定するのでも、否定するのでもない微妙な立場に、ということである。この日本社会において自明化しつつある世俗的ヒューマニズムや自然主義の妥当性もまた、「問い」に付する。「超越」を最初から肯定しないまでも、いわば「超越への扉」を開けておく。こうした微妙な立場から、一人ひとりの生徒がいずれの方向を決断するか、それを問う場を開くことが求められるのである。いずれの「答え」が正しいのか、純粋に哲学的世界観のレベルでなら論争することは許されるだろう。しかし「教育」という場面において、そうした議論の決着を待っているわけにはいかない。重要なのは、「人生の究極の意味」「自分とは何か」「死後の運命」といった問いを、学校という場で正面から語れるような場を

設けることであろう。そのなかで、超越志向の「答え」も、純粋にこの世的な「答え」とともに、可能な「答え」として正当に扱われることがスピリチュアル教育として求められるのである。

## 4.「問いのスピリチュアル教育」実践のために

これまでの議論を踏まえて、「問い」のスピリチュアリティに立脚した教育を立ち入って展望してゆこう。問いのスピリチュアル教育は、一定の正しいとされる価値観を生徒に課するようなアプローチは採らない。「人は何のために生きているのか」「本当の自分とは何か」「死んだらどうなるのか」といったスピリチュアルな問いと、それに対する各人の「答え」の模索を語りうる場を教室に設けてゆくことが主眼となる。そうした場を通じて、各人が自らの人生の支えとなる死生観を形成してゆくことを支援するのである。

ただし、「問いのスピリチュアル教育」を実践するといっても、そのための科目を新たに増設することは現実的ではない。昨今の「ゆとり教育」による学習内容削減の動きを考えればなおさらである。「倫理」のような科目を必修化し、これをスピリチュアル教育専門の場とする道すらも実行は難しい。

むしろ、既存の教科のなかで、スピリチュアルな問いと密接にかかわるテーマが取り上げられる機会を、「問いのスピリチュアル教育」の実践の場とする、という戦略のほうが実行しやすいし、実り多いと思われる。これは原理的にはどの教科の授業でも可能だろう。

もちろん「倫理」のような科目では最も容易に実践できるだろう。単に思想家やその著作の名前を暗記させるにとどめず、「ソクラテスが死を選んだことをどう思うか」「ニーチェが言うように本当に『神は死んだ』のか」といった問いへと生徒を導いてゆくことで、「問い」を語れる場を設定してゆくことは当然考えられる。「現代社会」において、臓器移植のような医療問題や今日の自殺の増加が話題となる場合、「生と死をどう考えるか」という問いを積極的に扱うことは有意義である。

「歴史」もまたスピリチュアルな問いを導入しうる素材に満ちている。例えば先史時代を扱う際、「死者を埋葬した原始人」の事例に触れて、「人間と

は死を認識する動物である」ということを示し、これを「人間とは何か、生と死とは何か」を問うてゆく機縁とすることが考えられる。もちろん、仏教やキリスト教などの世界宗教の成立経緯などは、「倫理」の場合と同様にスピリチュアルな問いの機会となろう。他に例えば現代の日本人にはなじみの薄いゾロアスター教の成立に触れて、その「善悪二元論」から善とは何か、悪とは何かという問いに導くこともできる。

こうした社会科の各科目は比較的スピリチュアルな問いと結びつけやすい。だが、他の教科でスピリチュアルな問いを取り上げることも不可能ではない。例えば国語において、人の「生と死」を扱った文学作品が取り上げられることはかなり多い。そうした作品における登場人物の生きざま、死にざま、あるいはそこに体現された死生観に触れて、生徒たち自身の生と死にかかわる問いと結びあわせてゆくアプローチが考えられる。すでに岩田［2004］は、既存の小学校国語教科書を分析して、「人の死」「戦争と平和」「動物の死」といったテーマを含んだ作品が多大に含まれていることを指摘している。そうした教材を活用すれば、現代社会を支配する「死のタブー化」を乗り越えて「死の意識化」を図る教育は、現在でも十分に実践可能だというのである。英語のリーダーでそうしたテーマを含んだ文章が扱われるのであれば、同様のことが可能かもしれない。

理数系の教科でもスピリチュアルな問いを扱う場は十分に開きうる。理科において、例えば宇宙・生命の起源や、生命の物理・化学的な現象を扱う際、「そうした科学的な生命理解で、人間の生きていることをどこまで語り尽くせるか」を問うてゆく機会を作りうる。そもそも「科学によって人間の人生のすべてを理解できるのか」について、つまり「自然科学的アプローチの限界」について十分な認識を育むことは、理科教育の重要な課題といえるはずである。科学（万能）主義が、科学的な態度だとは言えないからである。

最もスピリチュアルな問題と縁の薄そうな数学においても、ノディングズ［1993：2-4］は自身の教師としての実践例を報告している。例えば「座標系」を扱う際、その発明者であるデカルトの話に導き、そこで「神の存在証明」の話につなぎ、そこから「神は存在するのか」という問いへもってゆく、というアプローチである。また彼女は、「確率」を取り上げる場合に「パスカ

ルの賭け」の話につないでゆく、という道も挙げている。

このように、「スピリチュアルな問い」への経路はほとんどどの教科でも開くことができる。ノディングズ［1993：1］の主張するように、通常の教科の授業からスピリチュアルな問題に入ってゆくほうが、「宗教思想」のような専門教科を設け、その授業のなかでもっぱらスピリチュアル教育を展開してゆくよりも、むしろ生産的といえるかもしれない。前者のアプローチに立ってこそ、スピリチュアルな事柄が物事のあらゆる場面において問われうる、本当に重要な課題であることを生徒たちに実感させることができるからである。これは「カリキュラム横断的」(across the curriculum)アプローチの方法論である。

実践の方策としては、もちろん提示されたスピリチュアルな問いに対する答えを直接語り合うディスカッション、というのが第一に考えられる。だが教室で直接意見を述べあうことが日本の教育風土に適さない、あるいは少なくとも当該のクラスではやりにくい、と教師が判断するなら、生徒にそれぞれの意見を書いたカードなどを提出させ、次の時間に教師が紹介する、という道も考えられる。めいめいの生徒がより多くの他者の考えを知りうるという点では、この方法の方がむしろ望ましいともいえるかもしれない。

生徒にまったく自由に意見を発言あるいは記述させる、というのも一考だが、また一方で、生徒が自分たちだけで何の手がかりもなしに考えるのが難しい、と判断するなら、教師の側でありうる答えの可能性をいくつかを参考として提示するということも考えられる。例えば「人間とは何か」という問題について、「知恵ある人」「工作人」「遊ぶ人」「宗教的人間」など、いくつかの人間観を紹介してみる、というわけである。もちろんこれらの「答え」の例が、あくまで「参考」でしかないことを強調した上でのことである。また一定の立場に偏したものにならないように、「バランス」をもった選択肢の提示も重要なところである。先にも述べたように、超越志向のものも世俗的なものも、ともに選択肢として提示されることが求められるわけである。

同時に、生徒の側から出された「答え」は、それが超越志向のものでも世俗主義的・自然主義的なものでも、いずれも排除することなく真剣に聞き留めることが重要だろう。聞き留めたうえで、その「答え」がどんな生き方を

導くのか、どこまで自分と他者の人生を支えてくれるのかをさらに掘り下げ、生徒各人が自分の死生観をさらに精練してゆくのを助けるのである。ただし、例えば自殺賛美やナチズムや狂信的カルト教団の教えのような、明確に「間違った」答えといえるものに対しては、教師の側からの積極的な介入も必要である。「問いのスピリチュアル教育」の目標が「適切な死生観の形成」であるかぎり、「不適切な答え」は防ぐことも教育者の責務である。「何でもあり」であってはならない。

こうして、生と死にかかわる問いを明確に語りうる場を与えることで、各人の死生観の形成を支援してゆくのが「問いのスピリチュアル教育」の目標である。学校に通う若い時期に「生と死の問題」に向き合い、自分の死生観を確立することは、当の青少年時代はもとより、後の人生においても、生きてゆく支えとなるだろう。人生の終末期に及んではじめてスピリチュアル・ペインに直面させられることもなく、培ってきた自らの死生観をもとに意味のある人生の締めくくりを迎える、ということすら可能になるはずである。スピリチュアル教育は、一面では「予防的スピリチュアル・ケア」という意義も持つ。

さらに、「問いのスピリチュアル教育」は、展開の仕方によっては別の方面にも効果を発揮しうる。例えば「宗教的寛容教育」の課題である。異文化の宗教伝統に対して、偏見を持たずに理解し共存してゆく姿勢の確立を目指す「宗教的寛容教育」の必要は、国際交流の進展とともに、いよいよ高まってきている。だが、いきなり異国の人たちへの理解から始めるより、まずはもっと身近な場面から「寛容」の態度を培ってゆく方策もあるのではないか。

つまり、スピリチュアルな問いをめぐって、同じ教室の仲間たちが出した答えに対する寛容を育むことを出発点にする、ということである。「問い」に対する「答え」は、一つのクラスのなかでも多様なものとなるだろう。それこそ「神様はいる」という人も「いない」という人もいるかもしれない。一人ひとり、教室のなかで自分と異なる考えの人々とも出会うことになる。それは立場の異なる人たちの考えも尊重し、偏見のない態度で接する、という姿勢を育ててゆく好機となる。こうした、身近な場面で培う寛容の態度を広げて、異文化の人たちの考え方、宗教も尊重する態度にまで及ぼしてゆく

道も開けるだろう。それによってより実感を伴った寛容の態度を確立しうるに違いない。

「問いのスピリチュアル教育」の射程は、こうしたところにまで及んでいるのである。

参考文献

安藤治、結城麻奈、佐々木清志「心理療法と霊性―その定義をめぐって」『トランスパーソナル心理学／精神医学』2（1） 2001

家塚高志 「人間形成における宗教的情操教育の意義」宗教と教育に関する委員会編『宗教教育の理論と実際』 すずき出版 1985

井上順孝編 『現代日本における宗教教育の実証的研究』科研費報告書 2000

井上順孝 「中等教育・高等教育における宗教の扱い」『基督教研究』63 (2) 2002.3

井上順孝 「95年ショック それが今も人の人生観を変えつつある」「寺門興隆」7 (4) 2004

岩田文昭 「学校教育における『死』―小学校国語教科書にみる死生観」『現代宗教2004』 2004

葛西賢太 「『スピリチュアリティ』を使う人々」湯浅泰雄編『スピリチュアリティの現在』筑摩書房 2003

加藤西郷 『宗教と教育』法蔵館 1998

菅原伸郎 『宗教をどう教えるか』朝日新聞社 1999

菅原伸郎 「『畏敬の念』再考」『基督教研究』63 (2) 2002.3

杉原誠四郎 『日本の神道・仏教と政教分離―そして宗教教育』文化書房博文社 1992

田崎美弥子・松田正己・中根允文 「日本人にとって“スピリチュアル”とは何か―WHO質的調査から考える」『看護学雑誌』 66 (02) 2002

辻内琢也 「スピリチュアリティの残照」 湯浅康雄・春木豊・田中朱美監修『科学とスピリチュアリティの時代』ビイング・ネット・プレス 2005

西平直 「ヒューマニスティック心理学の宗教理解」島薗進・西平直編『宗教

心理の探究』東京大学出版会　2001
西平直　「スピリチュアリティ再考―ルビとしての『スピリチュアリティ』」『トランスパーソナル心理学/精神医学』4 (1)　2003. 9
西平直　「人間形成における宗教性（スピリチュアリティ）の問題―若い人たちとの話から」『教育』53 (11) (通号694)　2003.11
広井良典　『ケアを問いなおす』ちくま新書　1997
森岡正博　『宗教なき時代を生きるために』法蔵館　1996
森岡正博　「死後の世界を信じられない者の死生観」東京大学大学院人文社会系研究科　21世紀COEプログラム　シンポジウム報告論集『死の臨床と死生観』　2005
吉田敦彦　「ホリスティック教育と宗教心理」島薗進・西平直編『宗教心理の探究』東京大学出版会　2001
Noddings, Nel, *Education for Intelligent Belief or Unbelief.* New York, Teachers College Press, 1993.

1) もちろん、こうした「宗教」への偏見を解くことも教育上の課題であろう。自国の宗教伝統や異文化の宗教への理解を深めるうえでも、この課題は重要である。だがこれも、スピリチュアル教育を拡張させることでカバーしうる、というのが本論考の見解である。

2) これまでの宗教研究の流れでは、「宗教」を日常語で言うような教団宗教に限らず、ずっと広義で、人間に通底するものとして規定する議論は非常に多い。古くはW. ジェイムズにみられるし、デューイの実体的な「宗教」と機能的な「宗教的なもの」の区別、ティリッヒの「究極的関心」、より近年ではW. C. スミスの「宗教」概念の解体などがある。こうした観点からは、宗教（性）は、組織宗教よりもはるかに広範囲に、人間存在に妥当する現象として理解できる。こうした「広義の宗教理解」が日本でアカデミズムを越えて一般に浸透していれば、日本人の「宗教」に対する態度も、かなり違ったものとなっており、「スピリチュアリティ」という言葉もことさらに必要なかったのかもしれない。

3)「答えのスピリチュアリティ」といっても多くの場合「最終解答」を与えるものではなく、あくまで一定の方向づけを示すものである。その意味で「答

え」という言い方は誤解を招くかもしれない。本論考では「問い」との対比のために「答え」という呼称を採用したが、用語法についてはなお再検討の余地がある。

4) 本稿では、スピリチュアリティにおいて志向されている存在領域を総称して「超越」と呼ぶことにする。この語を用いることはともすれば「超越と内在」をめぐる哲学的論議を惹起しかねないが、「聖なるもの」「非日常」「彼岸的なもの」などの他の用語にしても一長一短であることをかんがみて、「超越」をほとんど記号的に総称として採用したい。

5) 実存的に問いぬかれたものであれば、その答えが無神論的、自然主義的なものであっても、広義には「スピリチュアリティ」に位置づけてもかまわないかもしれない。例えば「神は死んだ」と力強く宣言し、いっさいの超越的な目標を排して「運命愛」に生きる超人たることを説くニーチェの能動的ニヒリズムの哲学に、深くスピリチュアルなものを感じとる人は少なくないだろう。

6) 菅原［2002：13］は、「畏敬」を「科学の発達していなかった時代の畏怖感情を前提にした宗教観」であり、非合理な態度の助長である、と批判する。これはまさに「畏敬の念」が一定の立場を反映した概念であることを指摘した例である。ただ菅原は死のような人間の本質的な有限性と、古代人が雷を神の怒りとみなしたような、時代や地域に相対的な人間の有限性とを明確に区別せずに論を進めているから、その「畏敬の念」批判は必ずしも説得的とはいえない。「畏敬の念」批判は、もっと根本的なところに向けるべきなのである。

7) 「心理学的側面から宗教を考察する」ことから出発したマズローの議論が、「すべての宗教に共通する心理的体験」の主張となり、「心理的経験こそが宗教の本質である」という認識を経て「宗教に代わる心理的経験の探究」という視点に至り、ついにはこの洞察に基づいた「規範的人間像」を打ち出すまでになる、というのである。

（はやし・よしひろ　立命館大学非常勤講師）

# A Perspective on Education Based on "Question-Spirituality"

Yoshihiro Hayashi

The aim of this paper is to present one new perspective on spiritual education by redefining "spirituality."

In Japan, it is at least highly controversial whether religious education is possible in public schools. In addition, many Japanese people, especially in the younger generation, have a negative or indifferent attitude toward "religion" in general. This tendency prevents all kinds of effective education concerning religion. On the other hand, the concept "spirituality" enables us to discuss existential matters such as "the ultimate meaning of life," and "destiny after death" which used to belong exclusively to religion.

To practice spiritual education, it should be clarified what we mean by spirituality. The word "spirituality" is becoming more and more widespread in Japan, but its usage is still quite ambiguous. People tend to use it in different senses according to their own concern.

To overcome this situation, we will suggest the way to interpret spirituality in two basic phases: "question-spirituality" and "answer-spirituality." The former is a matter of question of the ultimate meaning of life and death; the latter corresponds to possible answers to the question. Question-spirituality is open-ended as to what the answer is : a traditional religion, spiritual discipline outside institutional religions, or a purely secular attitude. Spirituality accepted in this sense can safely be said to be common to everyone. Spiritual education should be developed on the basis of this phase of spirituality.

Education based on "question-spirituality" aims to help students develop

and decide their own views of life and death. It offers students opportunities to participate in and discuss existential and spiritual questions, instead of teaching them particular spiritual values directly as education based on "answer-spirituality does." This type of education can be carried out in all kinds of subjects, as long as spiritual matters are dealt with.